823
M5N

岷江入楚

早蕨

48

Freer Gallery of Art
Washington, D.C.

早蕨

廿四歳　中納言　年立二八廿二薫云々　花宮二八廿一

薫云々　皆以相違也

正月自阿闍梨方送土筆於中君方事

源中納言参兵部卿宮給折梅花献給事

物語宇治中君渡京事

二月一日比中君可移二条院給事

除服同事

源中納言奉御車御前人々給事

前日中納言君渡宇治向中君事

与弁尼物語之事　弁尼出家事

為中君与弁尼物語惜名残給事

移徙日事　二月七日也是ソ二月比ト云也蕨のうし葉巻と同し　初ノ七月此月のさやうさしおもふと云々

廿余日中納言可渡三条宮給事

夕霧六君御裳着之事

可兵部卿宮渡給事　延引之事

源中納言の君二条院梅壺中君御方給之
兵部卿宮出家遁世給由

箋黄公如朱

早蕨

花 以歌并詞為巻名

抄 但し此巻ハ早蕨と云詞にハ蕨とくくりなし　花同
河 此巻ハたれにかみせんなき人のかたみにつめる峰のさわらび
私 詞にわらびのほうしつかしおりし 此詞を入て又阿闍梨の奇
一 君にとてあまたの春をつみしかは常を忘れぬ初蕨也と云
花 薫廿一才此巻の事也　私云 年立にも相違なり
実 私 薫廿四才総角の次乃年の春也
薫廿四才なるへし 河ハ総角の次乃とし此巻を
箋 同意廿四才なりけりや

藪しわかねは春の光を見給ふにつけても
河古 日の光藪しわかねハいそのかみふりにし里ハ花も咲けり
抄 河古同し
実 中君此心のうちにも春ハ去年の光をわするゝ事
姉君はおなしく附属のうへにも
をさむ 藪しわかねハ林藪と云ハ
いひならハせり 是ハ宇治の里をいふ也
姫君にせめてハ此次のしハ春なりけり
いかに分つへきにかなしき
箋 大君におほせて中君此ことを思ふ
私 想ふしてハ春にてあれのうしろミ姫君にかはれ
花 神楽譜本末の拍子
すくれたるさまを知る事在
実 并此とかくの上句を云出し下句をいひつけたる事在
私 歌なとの事也 上句をいひ出して下句をつけ上句をつく
上句をつきなとして事に見ゆる也 何事もそのあはせの
箋 云此上下を次第にするや神楽の本末なとの同作法也

心ひとつをくらへつゝ　秘 まことにいひかくせさへ人のなかにおもふ也　弄八宮之 秘箋同
宮の御おもかけ御夢にみえしかはさらにも
私 八宮よりも大君をおもひ給ふなるへし
世とゝもに（さり）ならは　秘 世乃れは無常をつねにおもふもと死をかく
おもひたえぬはまことのほか又大君をおもひまてにとりひなりとや　箋
生死乃ことはりをしるを云大君をおもひ給ふにをいてや
ましてあはれにおもひてハ何事か　秘 大法にて文乃詞也
箋 宇治山の阿闍梨にて文也
今をひとつにかける阿闍梨　箋 八宮大君のおもひをあはれ也
ことしは阿闍梨もしきりにいれて
河 蕨 毛詩 蕨鼈 日註 土筆 ツクヽシ 本草疏云周秦曰蕨齊魯云鼈
俗云其初生似鼈脚故名之云〻 蕨ハ各別物也園豆也ト云ヘリ然
而和国通用也
わらひのたよりして　箋 仏法僧の物をあはれにとく也
ほうし　假令あはれ詞なるへし　字の動
身ハいとおしくそ　秘 手跡也
ひきたれちてそ
秘 大略師匠のうへの事をはなちて阿闍梨の詞にかはりたる也　奥 文字ともはかなき心也
宇治山阿闍梨 君にとりかの文をかきて法師の心をおもひ給ふ
弁 新古今集 那わらひのくさ人をもあはれの常をいひてまめやかなる　三条院大臣
秘 常 夜ハ八宮の御時乃事例をとして常にあはれ也
弄 ひしりのことはのしめなる　箋 常を思ひすて給ひし時と思ひ也
大事しなりひかりして　秘 中君乃心也
河宮梨は云をと一大事とおもひくゆる葉しるへつかれし也
箋 大事とよろしく人にもおもひぬる此歳の初に侍る
なほさりくさしくおもひかけぬことの　秘 白文は此文よりもまされる
なにけりうせめ　箋 おほよそのきこえなり
迎中君 これなる八宮の君をもこえ中人生ひとつにつけていはれたる
此詞をきちかはる八宮大君なしといはれてわか身にはしかつれ
河 たえぬるもをりてさのへしまた此たひにつけてのはたゝ業の也
箋 同弄同河海　私 わらひのくさは絶えにかくて也

秘 中君はさ給之 箋
秘 大君は事
いとさかりにみわかひおほく
さゆしむ物はかなりひ
句文乃うゝへしあはれ事よ之 箋　秘 おほし屋せみへかはるに大君に似之
むかし人よりもおかしき事り　秘 人をも見たるさ給ふかくなり
御前は女房ともみ人くありしよりもむ之
なんひのくもりしわいともきしかて　秘 絵角なと小堂乃りしは屋うかてと返事之
かくをうたにとかく　箋 此中君を薫乃相具して給ひ也
みくさかるのふ心もさくせ
つくん物すこく人は此ふさ之句文はさうしく世そんにあなた之又今ハ大君
ふようく似るかしせし心にかしこにしてさへるのはかりかれやと之
かの此あさり此人出かうけしく侍　秘 つゝむ此おさりし
奥 つゝむる此事とはしくへさくまり
おさうし絶えしきるいそす　秘 薫の大君を恋のふか事之
いやめよなるとめへる　箋 薫乃慈傷よ源氏おもへさ給之
宮にとら済くの心わさくにて　箋 大君は事しと薫乃深切よ
思ひのふ事を今いよし中君は思ひ知りのふとや

宮たおくりし御しとつらの　白文なり
なかひえ人すにしあさいりし義するを色にして　日高く
奥 正月よあり　作文有しるり　秘 大暑正月中に下事
親王云て宗下参して作文有しるへのえしく絃さるる事之 箋
人ふいはやなるて　つわか大君は此事語ありへさ人おもてなし之
ふかひいて人え人て　奔 つはるは此あかひなり
おりわりしう　箋 ふかよのふ此宮之
白文えけ おる人の宮にかくよふ花さかれや多くよふ出せそて人はみへしれ
秘 白文の之の之五文字ハ薫をいへり実は之俗のか之へし宮治よつよひ
のよ事今よ絃さゝかハ中君乃為にしりかりし義之
箋 是ハ白妻此ゆりしなりて文家よおねとハ未開此宮乃為よも之ず
哥乃義を高抄よおれし
近薫 見るる人に加へとよせかるなむの文を為していて地もなくへりきれ
花 大の宮にたて白露ゝ今よ事ハ思しててころくかり之れ
と葉は乃る人を中君を思ひよせてるや
秘 かくいう心持をやゆをつけて於へき事みれそ心うるにと

奥 かくしかくしつきて此ほとへはいとゝつゝみしてはかなくおもへりなれとも
箋 是ハ中君の事とやうにいひてよりゐしてこそとは柿本のもとにて
よりうる人とハ薫の形見の事をいへるにや人々のことかはりと白
のよしなくまいらせ
いとゝ我心おもひ
ましてさりかたきめりしう
箋 薫と白とゝなる 私 第四字也
秘 薫さへ猶あはれなとおもひて白ゆふの名もしきほと心うすれたる也 箋
奥 薫の実人さへなれにたりひ也
人やおもひ人やとかめん
花 わか身つらき世中となりにけるにし
人やおもひ人さへいかゝあらん
まことにほとあれにけりかな
箋 見る人の心つくる時花は家にも
見にはかなきさまの事ともに眼前の形見ともりていとしれ給ひと
おもひめさて
箋 傍なるさ給へ
おかしきをとききつゝ色にはいたやうさかきよしさ
河 春のよの闇はあやなし梅花色こそ見えね香やはかくるゝ
秘 此二人のおもひをよりあはせたる文なれとも也
箋 川寄薫の夜のやとはし
私 灯のさえなかに書て白薫なるを

君はいかやかなきさまにもしさし白ひさることいひて書なるおもひいひ
よりとめしさうゝりかる中のむかひと
秘 箋 薫大君と実ならなれはいとふりのふかなるにと
いくたりともさのことをおもふさりなくしと白のこひのふかさ
奥 薫と婦君と実中
なれはいかにもいふひのふかきのうへ文ありといひてかひしひのふ
箋
おもしろけれは
秘 白のかなしひなり
さまにかりのこ四えのふかく
秘 こゝろひあつし又ありにかくかひ
さらひのふかなり
かけのしき心のうちも
秘 白えの薫の心をよく推量その給
むねのひさある
箋 薫の胸中の難事の苦きなるとや
まもりみ人ちく
秘 白え中君を京へ迎てさきの事也
いとうりき事中にもりかられ
秘 うかかの我ひのふさ 箋
おもふことありけれあやしきなとあん
秘 薫の燥人せし事
されちや大君と薫のいかやもられの柩のこひのあはれとこ
箋 薫の中君の手をわかくこゝろし給と婦君のこひのふかしと也

箋 大君は薨し

抄 白文はかくうひのふてハと

抄 大君はゆつり給ふ事也 箋

ありはてぬ命なることまてを
もしたのみやおほしめさるゝいさと
いれてもみたまひもはてゝこそせ
いはせれとやのよふこ鳥りやいふらし

河 万葉王女
詞しくハ来ても見るかし人はくにいはせの森のよふこ鳥りと 奥入伊行歟
神なられいはせの杜のよふこ鳥いたくかなきそ我恋まさる 河
東ゝけるそ称今まれ何ゝはいさゝか薫大将を帰君は中君を
ゆつり給ひ事とハ世かめ宇治の詠す事にもしそ悔ゆくく気合たる
を給ひ身りといふ何れそのうれなひ方ならてたゝへし 称の助 花河

花 いはせの杜のよふこ鳥は森ともかけるを古今には作しれを仙をれ
ていふ詞しくハ来ても見るよりはなの人くハ遠なき恋や人はて
ふいはせの森はのよふこ鳥かれハ人はくするねとも思ふ心也又いはせ
は森をいふるは森なり薫源氏乃一本なりとこ

奥 中君に薫の一夜契りのかたしくをこそ来ても見る恋しくハ来
てとも見るよりはつるをひたり人はてなしてものあり来也とこ
一語よふこ鳥めいふりし書名るハ人はくするてもよりなかと

抄 恋しく見るハ来ても見るへし人はくするしても遠見し
ことの葉りしとやさしれたる見ゆてハ君の心にいふ見るなき
迷をハいひおもしのふや 花名ノ箋一説 箋日
ろうちにもいつかなきさゆるうれ 抄 薫乃心中 御暢之
くやしきもの見えし御さりゆかしと 箋 花の浮舟の事
かくかし紀の心をこそ出れ 箋 つやして薫は用意した
浮ふ人の白文は古君ハ西ひのそて中君こそ見ての薫をこのまんか
ふつしひきして見つかりせむをれ由かれて中君は浮舟をも思ふ
抄 薫の心移の心もいふ談のうて
さてもおもふ宿さんなつかしさてもも
箋 二条院ハ中君はかうりの本来なり
つしこにをよ紀わりことに 抄 宇治の宮に
は昔ハ人をかへしてくるも
むかしの思ひしけれ家の代の古君かんきの心や彼の見の宿の消ゆへし
今業宇治の古文のはしさんこともいへんとは彼の見をといふ 花
奥 いさうへの数をしつ 我世をも見て御こそ

秋 ほれぬとおもしみえしゆかりこそあれ伏見の里は見ぬまにも住かはりて次
中君の御心いさゝかに人の世を恵かへりの御身にもありしほとにて
宮にも行くへるとやむすふ前の御ことをかはる山里い思ひしん宇
治とあるは此山里に志有して見ゆる客と伏見と宇治まて志有 読之
おほしの伏見の里にとりもちし凡書き伺 疑様之
箋 川奇いさゝかに人の世をしし これは此里をとふよなり人の世は
亀なんとて下になりしへきる之　私八文此の人しく此山里
をあとりれのふかなとれのり しし半おもてみくなり
河 伏見 在大和国 日本記曰 安康天皇崩菅原伏見野中陵葬
まかりやうしし此里の何しまし人の伝を後と北
おしてそれといふそしあまて此まし見てと云へる此宇治と伏
見と云ふにおほしい次　此和歌ハ大和也まて見かりて伏見と云
河さりしこれ仙人よりあるへし見とかてまて菅原と伏見との
さりとそても又まてて候こそく
たのきれのうしと 箋 うしろそれはよりおほしきたく
浅りしね中此ちさりと後まてわへ覧
秋 中君乃心ありそれに 箋 立之
箋 白此中君を假之

秋 かくても見てハ白此の身のふるまひと後と見そ見すまた此身の之
いつまへのうちんと　中君乃おもひよそ何となく
きりしきれつひなるは　箋 二月なり見此なり
むかしのあとおもし花そ山と　秋 庭の梢之
箋 ほかへやすの袖之
常此泉の京とて次てんてにそかくのりとこ世まてこにわかれ故
河右 蓬莱山とて見やうとしつ此かいもな里にはとやすし何
とのこゝとしくは腕しおよせて上へ宮之　常世(トコヨ) 日本記 蓬莱山 日上
むかしのとこふう世次さ此やりわと見ぬり 古今のうた
優婆塞宮 是此京の宮は京のりし 下をいふて
弄 蓬莱立とれ京とみて書り宇治山里として嶺とさる袖之
秒 春宮方をきふて候一人思京とてかより悉皆手紙身を居
小はして山りかうさき蓬莱とあるを 見いは宇治の山里まて
此まてれハこう此宮とりかりれりしろし
箋 今渡りの上宮ても中君の宮てあしねりを山り蓬莱立を
見ゆてく帰る居ハ人の宮てへゆく 花の木吹のりてのまちく

花乃露の色もむかしにかはらぬをおもひくらし給へり

秘 こゝろハ故宮を思ひ給ふ也と中君ハ故宮にわかれ給ひし

袖のなかの人をしたひ給ふとし宮をしのびまゐらせ給ふ程を

思ひ給ふ　山里よりもなほ都へ出給ふ人ハおほく

御なげきをつきせず河海

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　弄 なげきのなかの中君のうへをおもふ恐怖しかるへし

河 つきせぬはなれなぬ人のなげきなりて除服をめしかへし給ふ三ケ月也

秘 大君十一月よりうせ給へり九十日の服なれハ二月にあたる也 箋

　祓度する車見河海

みそぎをしなさん　除服の事也　河原にてすゝ除服をえ

給ふ也ハ兄弟の服三月也　服の事なれハねきかへ

る也は父母の服のことくに思はすやと思ひ給ひて浅くと思ひまへ

弄 みそぎをしなさんとハ軽服のうちを思ひ給ふ也除服の時ハ河原

おもひなしにて浅き川の瀬にて御祓をすゝめ

秘 中君乃心にあまり浅くおぼしめす也 箋　　奥 浅くおもひ給ふへき也

おやひとつに　秘 母上をハ児にてうしなひ給ひし中君と母の

思ひのふかきやありて母ときこえし人ハなく

箋 中君乃誕生の時母ハうせ給へり

はかなきゆへにてよりなれハおもひもきこえ

ゝて川のほとりにおもひてつくりなり　箋 かきりありて河原ハなきか

御車のうちの人と　私 いふへし母河原へ出給ふ用意也

よりせまほしきなりける　弄 除服の穢の為に女にもよりせ給

ぬかふかさ　秘 女にもちかき人の為にまうしてなくとも

惣葉をよせハ陰陽師かなくても女房の為にもよりまうし

て陰陽師をもなしにもや　箋 こなたにてあはしくハ事なし

除服ならハ必す陰陽師なくてかなはぬ　神祇官も用也

よりもしや蕨の衣なからしおなし色のまへに用なるも来にたり

一説中君のあはれさ　哥の心ハ兼見の歌なるに思ひ

中君の衣穢をおもひ給ひて大君の事をおほしなるへし

母またハ中君の除服もとなつかしくもやあらんや　箋

奥 かはり給ひし　此義一つ通の中君の上を思ひ給ふなり

或説云中君ニ付除服して常の衣にかへ給ふ事　哀なれ

ことのおほきさに何しみえへし宮のひとところと面白きに心ゆくは
中君なとに似かよひにまさるへし宸の衣なとのひもとくに素服なすへし
なかれいかし　宸の衣ハ服のつかよそへ花のひもとくハ除服なすへし
きに見しいとさもしけにて　秘 春ふくハ言の葉を詠て第の子泥しく去るへし
御ようり此れよのつ何家のの　秘 京へ出のはへきれ料へし
京ふる人しふともかりへき物とすへし　弄　秘 薫の念誦ハ念さこえの事
打ふ侍名をいよ御達わきゝ給ける
かる人とも此なきハかつ給ふことを知てまゐりて
奥 実なかるに似たる様に　秘 物なまし気にせ給ふ本意をたてり
さうし人ゝは　弄 好色めいたる
ふつくしハ渡り給ふへき所にもさそれ　秘 薫宮治へ渡りおもふ
ことハ二月六日之中君をむかへに宇治へ渡りて明石小君へ渡りし
はらうさ給ふか　秘 あかまくし
今ハ座しく物すれて　秘 大君おもひせられや
家つゝく人まかきさらむ　秘 大君をまつり京へうつりまて
色しやと本ものし給ふなり

さ渡ふりきえれきし　秘 あまうちに大雁にせし成さるや
私此段ハ中君れことの家この中そ思ひ給ふてのみ薫お思ふへし
かいまいさせしきさやしれおかる　秘 椎がもとにて春へし
こおゆ事をえおわしさあて　箋 人のふかゝ此あの本のきも給へりまうし
うちふかく人く　秘 大君乃ことを云ひ出らるへし
うちひとにおつり　箋 うちこふかれなりしまれ称へし
中君を渡してりよ御され此渡の河よあまれいつりと思ひ給ひて
河のよ見さまの渡の何と申され渡り此初斎後母の此類あまた相之
秘 河よまかせて宇治京へ出の本意あ事へし　箋
叱 京へまつりのみ人事何ゆふしてあまりし　日 此初何とし
箋 中君此渡之渡り君なし花ハ此渡ゝ何との渡り河を移て宇治
月は乃情なりと　秘 のかる人情ゝに宮ふ初し
いとゝ河しれ世れなら　秘 夕旅むきさきのとくし
私大君乃おもひしゆきされてこのさはもつゝりゆく人事をたてり
すへしあなしとおもひれ宵かんとしも
秘 中君此也のこさしにさしまれつゝハ思ひきれともやう　箋　奥 中君ノ詞

いとかくかゝりし事に　秘 薫ハさる事也　細 薫のさまは中君の心也

姫君たちおほしけりさしかね人めも恥てしなさし　河 右姉君たちの事也

弄 姉君は中君をおもひ出て薫をあまりいとしくのふし 細

大君は事よりもうきはおもひしらぬのみへ事おもひて薫をは右方へ思ふへきやうなき也

物かは世をは思ひ物語事也　弄 おもひ君は事也

なくらなこしいとまへくやうなき　中君は句の心深くおほかれは薫用意也　弄

さるへきせのふし道き方ちかくは法思ひてうち法ひのふし道なれは　侍り

秘 句文を二条院へ中君をまたへのふし中也三条宮へ薫を移しへ

こゝや法れはおりくちかく成へしこと

中君はとかく猶ふへき所を二条院之薫を三条宮 行りなく

行りの事へきあらし　猶ちかく物へ申事とにて

奥 二条院も薫の三条宮行りそて行幸んけしまてをりのへし

法さいしき人かたいひ侍る　弄 夜中暁とさこしめ事へいりるてもや

む むつましくもこゝらは夜中暁とていそれは思ひの侍事也

細 世よりて恋切ていひけるすきしと世俗にかくいひすてうそせるなり

秘 法さいしき世俗のいひ事也　私 つきしきりうちこむつかし紀前也

人ものつき道しき侍る世かなれは　秘 中君の事を心へいりてやうこし

細 家の心にへ陽におほしよする事もしいのへ乃さおもへるをはりまかる事なり　云り

あるをはりし也しはかなき事なき

河古葉歌 今ても初るゝ紀物と人まほしあるをもはれはやとみかへりけり

いかゝしく宿をはりゆしと云前有紀文詞なとにかへなくし

花中務集 思乃えれはさを忘はれ思へとは宿をかへし君をそ思ふ

弄 中君詞或本宮をかくし心同宿をかへ移しもとこなへとなりよ物を

おくなりてそのふへきうかむりしとや

秘 川寄にうつりし不叶也一義ハ此宿をうつりしをこそ任へしとへきてしよ

物をかくもかのふへの事也又ノ義ハ薫のあれ詞を続ていかふき

法を思ふそのふとなし中かかの道へきる物を思ひてもはのふたおもし

思るそらか知ちかくるとや此義この説也

細 前に思アリ川寄アリ此紀本に及さる故に中君詞之此宿の

里をいてかしきとを思ひよる物を薫の出京なりしと定め給ふよう也

私 秘ノ給ノ義并細義ノ義なとこの説前にハ此紀之をわしさんするを

やひけれは法りもおほせ給之給つすいへいひ宿をへうつりしと云

皆此山里ともよミ一意也
ここ猶しいミちきゝて　箋 中君ハ薫へもしもかゝなく
いとよう扣旧し給へるを　秘 大君ハ似させ給ふとや　箋
いとくやしく　中君は心中也
己れよりのこりかほをそこといへる　あはれ君を思意也
箋 大君乃うしろひつくれ中君とそこひつしものり　付のよく
覺えたる人をつかりけるに　たゞかくしる字へ心をつきそめ
春やむかしの事と心よりもありよしもけれ
河 月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして
奥 川音 葉室は二条の后のこと書に思ふよしをかくあり
秘 川音の詞そうなるかうりと見えたり　下は后ハ二条の后を
葉室の昔なるかしわをとかけきあるの心をまた立り心し葉室も
同しかるべしとや　箋
なをまこのいのめふところハ大君を思ふ心ハ中君も薫も同事と
あらん事なりしかどもおもほへ出し給ふ須さなし

河 夏 さ月待花たちばなの香をかけば昔の人の袖の香ぞする
秘 待さるゝ袂　端也　弄 月　箋 川音さ月待し
弄 まそて河うちちかき
待まくしれまほらさしたるにも
帰君はくと思ひ出し給ふ又ともとられましてある事
秘 大君の時分をわすれてわするゝひとり物すまし
みる人をおもしたまふ山里そむかしの風のありがたき花のちる
弄 中君の音にて我方の御方へ出る事をまた帰君はなきこゝち
きこゆ　私云此箋よりのゆへに　弄
秘 大君の事を薫の花もしよりて一人思ひ出る　箋
箋 中君は此里を出る也を云義わかれたる不用也
日 花ハ大君幷手を思ひ見る人をもあはれしとてけるあり
私今る人をもわしにやうにて中君は亡人へ濃ならぬ小心
とうよりあるやうなるをにほひてをりて梅の句に一つか
大君の事を思ふなりぬへし　又薫の名へおくらし人のひねすて見ぬ
秘 薫は立今し
なけりしをにうち立今し
近衛の 袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根こめうつしし宿やことなる

河後撰ニ見ユ
垣ほしにおりくる花を見るれハなてしこに風の吹もこそすれ　　細撫子とハ薫の一夜の
哭中君を姉君にならへてみれハ
何もおもひや　此君を折て似合さるへしと云々
撫子のねハ根ありし中君の事へ移りてよめるなるへし
本を根なるらん撫子を喩へて　秘中君を花のよそひにそへて
見る人に思ふ事へ出の心を其根ありかてくしとや
撫子のしー　箋中君の事をなそらへ撫子のねハ根なりし包へ宮
なまを云や　私薫の一夜の事を思ひこかれたると云へる
あく心なきことを思ひよく　　つねなかさきと
ことおしくもなし　　かのうちさへ　箋宇治の宮の御事を
此宮とかりにの心をうちさもの事人
居さかのとのかへ有ること
ころしうしもうてに　　花ハ薫の御知宇治の中宮へ
かうちからくてけるを　秘弁の尼又姫君を大殿して申さし 弄箋
またかくなかく　薫の宮おしのにて　哭一説さけ尼とは
いやむかしをみなの　箋薫の心と物を八宮大君の形見とし

あつにさなかれもとなし　秘かかるみの御詞也
いとも見苦しきかく　箋薫の前へ参へおもて世人に便りなき御有様を
いとふもさまてのひ待る命かな
河おくさまの御事ハ池の撫子をなとかくいふもをかしき御なかめ
秘おやしなひをいふとを思ふていつかハ思ひ出もつき
日川奇篇のあつまと宿りてし
うちまてさ見のひなん
なく世を思ひの人さへも
見てこれ世をもうし　秘大君の事を思ひそへや　箋
法しとも心ふるまう待る人とを　秘かやうの事とおもひつかれ
いよいよいにしへなくさ見人のふ
おもひかりしさ筋のされ事ふ
弄さけ尼の時よさ筋のかりて
きみのことはやひかるやと
河閑栗ミヤビカ　又窈窕ヨウテウ　文選　又閑ミヤビカ　白氏文集　又瞷睮ウツタウト　遊仙窟
おもひなとひくハ申しる　秘大君を思ひのふかりより

河栝太かさ此宮の御うへ河の
うつふ
秘かやうの事もおもひつかれ
つかるのあさましひ
少さけ尼の時ふさ筋かりてよる
箋よしくこの事法さと

てさ海にみれとは言ふのせかうちすゝくさせ侍りてみけるゝ也
海すとるゝつ有物をとゝ思ひ出のふし
きにむ寛にあまひかけかる
秋 弁かさ滴し
法きにたり川なをとゝれ河にこ身をなるけ人みなそくれね義なるあし
花 さ犯ゝくる川深のこゝちふさそこつきぬれるいつと思ひなる思乳
実 姉ちかそ手ばこ思へり
秋 人みなそく彼ねとふん乃中のおりうえ太た夕とをく飛滴し犯とや
箋 物おまひみさ犯ゝなり川物さ深河こそれかゝ身をなけえ大なとをく
新に思ひきかしゝとや おとしらさこふし
うらこそとゝ中也
秋 なさくうゝにをかしす
箋 うらきつそし忌ま進しるなさ滴し
それともいゝしつゝまりくなれ
秋 愛とは知くすりして弁と慮の縁
箋 菩薩の釈之 四十八枚之十重禁戒よて十戒とあしみ五戒
あしてもオ一ハ殺生戒之 秋し身となるれくもるも殺生戒は門遠
彼きしにいつる 河 波羅蜜之梵語ヲ翻して到彼岸と云
此岸よりし思みへし彼岸ゝいるま乎かしゝうちまうく実なや

秋 入るなしをとしては佛乃制戒とあるひ修道は彼岸ふ到る乎と縁なる
箋 殺生戒を被りてハ彼岸に到る人乎と縁なるへしとや
秋 なすうち法しをうまししきのみへさえとは家く身をなさ
なをしてハ彼岸にいるゝとし又あるひ彼岸に到るなれ
さえらりにあるへとも先深きなる座に到るふりを法し
きれくも思ひふさきのへしのみて
なくらむをりくおまひそらんへきよんに 箋 命をおしよも縁く
こふも思ふさ飛浮と思ふるへく思ひあしてなことへき世そうこと
秋 読牛もかしくおりふつしやしや 牟同
身とおなり深の川とき河るそと思し犯せとに忘まれ志つ事せし
花 深川そこれとく法しなる也をそくおせゝになりれ而れ
実 空とれのふくとも犯思ふりてれるハ切るそ忌まつう告ならる中し
秋 人かえうく我化しておのへとも身をなく法多くうく犯とや
箋 身はなけくとも人ま悟を初ね物なれハ人をこふか執心をもれは
すそとも自犯面ちし縁ふ
人思ふこゝろむりてしややや
秋 無始無終し
秋 旬之乃なをと思ひかふし

奥 二夜まてとゞめられ白宮のやうにかはりたる人有しと見たまへきさ

私 奥にて二夜まてとゞめられたるとは見る不審 是ハ薫の宇治へおそく

きたりしは薫の夕霧のへしけるを見ておもはしけること歎かしく

よきおくれせしなるへし

おもほしけのひつる　秘 中君の浮舟のこと被言

箋 かゝるはさる事舟の中に君へ申けし　箋 宇治治母ゆかしく思ふへし

こもり人たゝ中きゝたる事

いよし悪つしして　秘 舟なり 箋

人気にうたて見ゆる袖のうらにひとりかへりけりとさるまゝなる

河 後撰 唐衣袖しの浦のうつせ貝むなしき恋に年のへぬらん

よくよみてす なりけりとも海にかはきぬきかくさをとこ海よりしに神のうへにしてこゝろ渡られ

日 舟君なりしくらるまで海をかへりかたきにとゞまるかや

私 袖濡る出羽 云ゝ 独藻塩をとるとは海士のすみなるへし

丸ハ字て出かへんかこそいふなるへし

うき人をきこ中道ハ 中君の舟尾ハ年をとる人也

そさぬる川とうしやむてきれかてハつみをへりし次

しほたるゝ海士の衣にことなれやうきたる波にぬるゝわか袖

河 此うたは舟をかゝりしをきゝてうきたる波にぬるゝ

奥 中君の歌也 あはれなる中にも弁尼か袖にかゝるを見ても

うきたるは波とは白文乃うへにもうきたることをうちかへしうきた

涙舟なりとのことなり

秘 中君のさまはかくれやかにて我しのひし尼とも袖にもおなし

むかしうきたる涙には乃かはかりのたえし 川舟浮渡しの心也

うきたる舟し此舟よりよせけり 此歌緒句の子かへてそ西

秘 中君弁にのたまふ初也

世にたちまとはれるよも

箋 中君の羽白衣をもむひとつしてされて又君へきこへさせんも

わらんかりしに守治の里をおもふさしとなへや

秘 尼なるとも見り

かゝる涙よりもたなき人をも

秘 大君也

ものし此人君のそはゝひのかひし

箋 大君の調度よりとも弁の尼にのこし世をのかれし

かゝる人またまかく思まえはさらいてそへるをうらはれし浮舟の世をいとし

秘 中君の初也

日 大君を一修忠慕せるとよむともいはさりや

奥 弁かうけたまはるゆゐこんは婦君の千とせをまつ心地して志あはれなり
河 さえのかみのいのちのこりてたちかへりて昔の世のこともおもひ出るにや 弁の尼の事なり
よしなくおもひくなくやうに
奥 子の母を恋ふるに似たるにや
これのきこえしひのことく
御車ともなく 秘 帰地にもや
ほとりにて 供なる庄の車にもたるへし 秘 道也
いりておはさなん 秘 句なし
あるこ尼のよのへてき 奉 家をもむかひて此のよしある也
此の人にはあはれなりけるを 箋 薫の念のことふしひのふしとや
大輔の君といふ人 宮の女 中の君の女房也
さて物語にいふ徒し事世のみ逢ふへき事なかりて宮の浮舟にかけてよしもなき 秘 中の君の也 箋
河 花鳥三
新かきの人のことのはをよめる 源氏物語にも流逢やと
牡丹集中
色になれありとしも源のおもしきになし流逢ありやなし
九条右大臣集
かたみなる君をこかれ身をうきにとおもひなりけむ
いのちとなるにさなし かなせしをなきにし 高きの宮也

奥 新かりにしまのこたへかなはのかるへし
入れの事ゆくはきれいなる事は 匂宮の紀伊守にも只ひ
ちとせにはかのうへも紀せよものかしとかりてよしなし
弁の尼の人をこえこしたり 中君の御ゆかりの弁の尼の心に
えにしをみしものを中にもかへんなかへにとなり 箋
今一人
色めしの恋しありて女あるれこかたをひにも色のれ
秘 此宮は只かもうありあり事なし 交二ヲ 将先
奥 今一人との車にのへきせ女房なるへし
此今一人とは難しも乃つれ此君ならしあるもの色めし八八文大系
の事に、兵に大君九りあさく一の紀なし
奥 よし事もあし尼とすいかしのれ流ことも
此女房とは婦君の仰せありし人との心の中の君の御事也
のこりをもしておきてかしとある事よや
秘 大君の御せし人とあるに契りしとありて申の文かさなりてもや
箋 中君の御あり此人の姉中の君にあらしともりて住み見ぬの心
尼の仰ありけるにてすてし山をちてくら山道と云

面白し渓嵐なとなれと○とて中君は人すくなにいはんかたなく思ひ給へり
抄 中君の此うちつゝきはかなくしめやかに見給ふなり
法の道のこと思ひ給へり　秘 匂宮は何となくしるへし
さらに今は何事も思ひやらむとや　箋 道すから夢の心や
七日の月さやかなり
なかむれは山より出てゆく月も世にすみわひて山にこそいれ
秘 歌のうちかさねて聞ゆるなり
箋 月を山より出て住わひて又山へ入らむとき此歌は
今出ると也 此女字なやむとて（かくなと）云々 此歌
みはつるへ云々 思惟していたはしむ事なりと云々
秘 中君の山里をいてゝ京へ出る月を山を
出る物なれは何とて借住て見えけるとてはいつれん
と思ひしかは出ても思惟するへきり 我も山を
出しなからとて思へし我か身をしさむかへなりくわれなそて
さ歯りいひて給ひいはすなと　秘 我は山里を出る事を思へり 箋
ゆくすゑもしはかなくとも此行末は思ひなやまし

抄 匂宮は道の程のはるかなるにさへ思へりとや 箋
箋 なやみは中君の御あとにて匂宮の跡をさすにや尋ぬる
也 也宮仕の人のこの情をしてらめやかれなそ思ひしなりけるは
よの中はふかき所もなきとや
このいつみへまいりてたゝ中に　箋 此二条院はめてたた
箋 東の桐壺は又源氏のまへゝ伝りて又匂宮の御住所と也
河 泉 これはいかにもあるへきなるへけれ后御殿のそれ
御車はいつくよりとおほしくて　秘 此家の御事也
箋 匂宮等家の事の中君も宮の出給はんも
いつれよりそこらなつかしとて
秘 中君をかしこきものにおほしつゝ宮の御はからひ
箋 たゝ中君の御事ひとつにおほしめしけるは
今は明石中宮の御許には容とや　河 不知縁
おほろけならす
廿日あまりに蕨を　薫之条宮を新造

有て同月廿余日に梅津にくたりしやとそ　奥 三条かたを維り出せと問しさし董風等之
あのかりしは日にに
こゑ琵琶ちう紀州しぬれハきこえしとてきりんとなん
二条院三条院ありしを弔こと定治とも渡りの人ならぬ事を
董の庵しくて君又ゆるて三条家より出ハせしとや　箋 句文は内惑切の御なるへし
御心のたらくのそすへし給
られし賛との（つ）し　箋 董ハ爾中し焼つさ物の梅さし
とのなもりなるや心し返く　奔 川欽
河 とやまかりそのなもりなるや世中をなにしなれ乗舟のあとと忘りし
秘 さりとハをのなもかるやむし白ほ浪し　箋
しなてるやにほの湖よこく舟のおかりわたる舟送りしねと
とそのひくくさ内ありし　河 りひくく次房し
河 しなてるやにほの湖よこく舟のまほにもいうそ逢こそしうな
此歌大暗同輔之沙弥先達云万葉より拾遺雑にも
或又伊勢物語にもありしめくよくあるやとしてきこし万葉にも
わすらるる識出山の歌皆之仮物語すし八一挽の帯なれすし

空蝉乃世を嘉なり　中古よりても法性寺関白くるてく
のかなのうらさひしくと詠せし　後徳大寺左府なりけれ
あらしと云て之なれたるしよ道なり　しなてるやはみ海
の起之しにほてぬ同らし　白氏文集に湖なと書り此事の
或文雑波くの郡ある塩江をりしてぬく此いもいふそと云ともし
ての湖ハ塩海なし
奥 万葉よりかしらてあり子由河海て見ゆて云ふ云くしなて
てるとのみあれにほてなるとにし白景山のしなてるにいまつり
つし云歌をしなてるかてるかふ景山と夕日なとのかよふ事を思
秘 万葉の哥歌かひさなとれし河海ようなへくり　董ハ此句か身
まなかなりねとも道らしてはきみしね歌とやしなてるる見ハ
湖なれ何なるへし　日本紀にしなてるやうらと思ふとあるを
なれ事なるへし　此うちといふにようてしなてるやうらいぬを
のいつ川あきゆよあり　万九しなてるやにほの湖にし河海く万葉
をかとりあらくきさしに紀此哥をとるなるといはるへしれはさやし
まれい哥のゐしぬまのつくしなつとも本末哉はゐさへれなるなし　箋

又或子問歌主万葉をとりてかうの海や衣のうらにこく
舟ハまかにも書おくしきさまなるかれ　まかに高香なり
箋 是ハ萬葉の右方此末をとりて云々くにけ作らしるや
相骨ハまかにとしいもふかひそしつらすしに萬葉を実定
なきりしつるをひかしいと志のえ為なに所存すし相しも
念達らしかてしいひくてし為紀とし中君を人に思ひあり
又すして後悔此れりしも亀しに萬葉此之為也し是こ光
流の説に様名流同や云々とし仍秘ノ奥ニ被演之年
右此大との君六君を　箋 夕霧と六君のうちよしとかる
萬同侍従し
おりひろ如此人を　中君此事し
ちのかしよりさこ此めしおぼしかふ　箋 六君此事よりも
先へし中君の此らしりをいそ紀のへう極まれハ夕霧候立此也もし
るれまおそれまハ　白文と六条流ホし候のえハ夕霧と同断
の此之今ハ中君かこりのふ存に二条流こ白此おそれ存を云
や文をとれし　秒 六君此つるへ白我文あるなし　異箋

御りきれてし世てしらへきそて
六君當部のそてやりて白文へむくるひてし夕霧此御子への為らしう　箋 六君若當部此事ノ
中君てを流進て思ひとて志けりねこし當部君を延のえハ人まうし進
おれしゆりりてやつししをあくし
花 夕霧大臣て萬大将し此兄弟此よしし　箋
此中納言をよりて人すゆつてんり
さんハ以相しおよし夕霧此おかちさし是を白文此由心此さのこ
おもむうねるうかし如しふ存ふりしおぼししうろかうへし
とし此へ志進ねとのしおぼし　めそし　箋 萬此人おな寄にあまられ
きし紀とらせのをを　箋 夕霧六君此りうへして萬念此かへ　箋 大君此并扱いて
まとゆし志しお用ゆれと
此君さしおかれしてしうるあとを　箋 萬我我家まとゆましとされ
私恋そ思ひよりてしと夕霧此さくし　箋 言ユト出イツル
秒 此君をの用らしおかれしハ念此て以為てしすとか　異箋
奥 け有ゆく白文をしうけひりれとし
いとりうし年にとの　辺へて　箋 萬此さ為にいふありし

人なき方に夕霧は見えなれ共立ては見のほれるにや
出さうりけれはかし　義 三月なるへし
二条院のさまを　弄 かゝるは見のこして
わか君の宿の中の川忍ひ座しけるの人はたて中にもやうちて
河 うつくしみわか君の宿の桜も冬にかはれる宿なりけれ
花 若かへるへき君をさく〳〵しむ心座して也風なりちり也
散菩 かき院の東わかしの義宿は桜花の中にもやりちるにちりそん
今案中の羽くら中にも座すくまゝ重葉のうちの方に付たり
わか君の座をハ宇治は古宮をいふへし
弄 川かた方にちらの東わかしかの宿し宇治の末はなにのとまり給ふ
抄 葉宇治をも見ひ座りのたり花なかにひの道あり浅茅原は方の目也
川かた方にちら原わかしし　義
うち浅茅にさひしくもしらの浅茅原なかの宿ハさひしかり
宮は浅茅のしけり　弄 句文也
句へ葉は東りのこしにおゐ三条宮の葉をかくりの人すなるへし
方かりたり　抄 二条院也
義 二条院は対してのゝ句の文はおなし也

されはいまの何を　河 実也
葉中には宮を中の宿をまたひ後の人のへや　義 車は具となし
何くる所のさまを待ちくして
句文乗同も同意なり
さちいくのみて　抄 中の君は宇治方に葉は乗り後の心也
あいのさてかく　中君をなし　弄 中君のこと
山里の宿をしてひかたくなして　義 宇治山里也
よくの宿山宿にての　義 女ハしらすくたして乗りのへきよし
葉同しのふなり
むかしは何ま也の　宇治にまかてかくしへなるへし
実 葉はこれを知りてはかくへなりくへし
義 おれきより出させし
胡夕の座をみてある所しらん
義 東中に晩は東中のおも宇治にまかては中の心しも乗し後のまきをいふへし
なれくし見とみや　抄 つかうま羽し
世の中のかりかける　義 句文は中の中いはしとや
義 宇治の座へかへりて後の対面も難を立たり

御前の木末も色々に色かへて　弄 薫の心を歌によそへて
詠みて見るらし　秘 中君のうらうら色くそ御覧しきこと
義 おほく二条院の桜のさかりをみて宮の御ためしまても
大君のかたを思ひいつる
うちかへしおもはしき事の御有しさま
かくおほせまし事は　　かやうの事さへし
義 かやうの御事御心をさへ御覧して大君の事をおほせまして　秘 中君のいてまし
かくては心ことに見えも御覧しきこと
秘 若君出のありきて御前の御あはひを中君のすきかはしを
若君いて出のかよひて御前の御心の事を
くちおしき事をいとしく御さしかける
秘 若君も付てし葉の面影を深く大君を思ひいての事おほえ
御覧すかたに付てハ一しかおもひ出の事なり
人々もしよのつねに　秘 つくつくと世に出のかた
義 おほく人々をさぬし
いはれしにて
秘 中君の薫へ御心をよしとおもひて御心へおほしこととし
弄 中君の御身のいかにもかの御をこそけれし
義 今しるしをて中君匂宮へ定りぬへハ人々の思ひ疑もなくまし地付きて
給へハ人々の思ひさはきて定まりし

人はなくなりしに
風もしらひのみかりしに
文はなく給はんとて
ひきおりしあかりけり
なかしらむ事にさしられて
義 かやうに思ひしく御心へうき

秘 中君の思ひやしらしひのかへし
中君薫へのいひ思ひしむかしく
匂宮の事にあらんとて中君へいひ御心にも
心得かへし
秘 匂宮の御同義
御あそびの中に御かへし
あやしやなりかまへて
よう御あハれこう御しき
宮へ御心にもよそ御覧じ
いつまで給はんとて
義 むかし薫こ中君よりのたまひ
さハおぼえてもなかなかいひせんとも
一つきまして
義 匂宮にのたまふ
歌の心をもおぼしたり
これ人をもおもひのほかにめぐりやうは
いはしへのひのぼりて
弄 ゆのいてしよりつ
義 中君の心へ一つかなしかりけること
秘 つかなかり
義 中君の心し
薫を中君の大君の心もともしひの中君のことも薫をさかしけり

おりふしきれときそのなけしハさ年まてゝは白れやうや庭せ
つくしのかくた雑談とや
うつし庭せりしくのかへてゐしう おかされたり
中家氏四なり